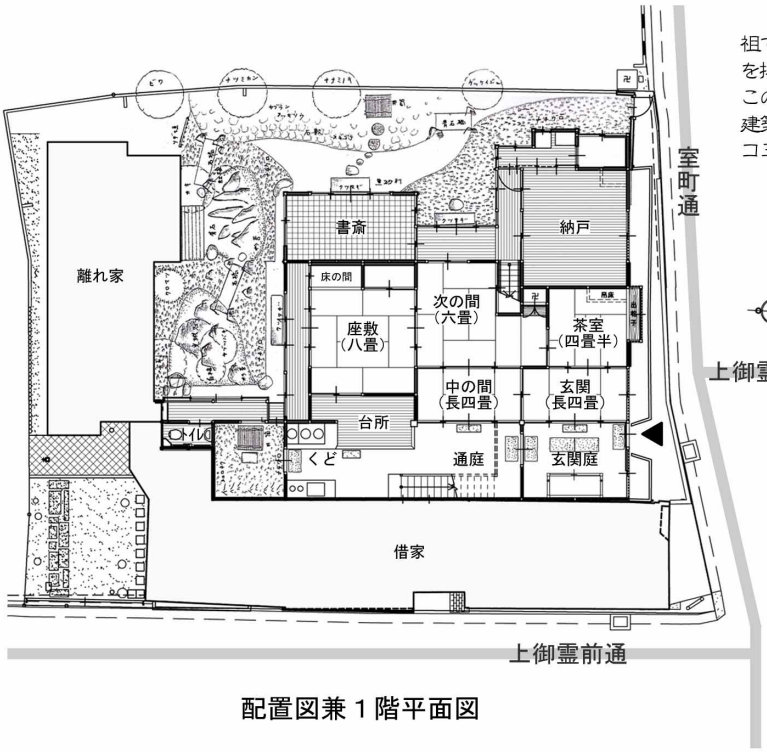
国登録有形文化財
市景観重要建造物
歴史的風致形成建造物

生谷家住宅主屋

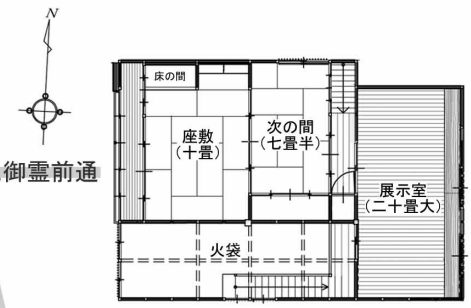
平成の改修工事　設計監理　（有）長瀬建築研究所（１級建築士事務所）
施　　工　梅原工務店



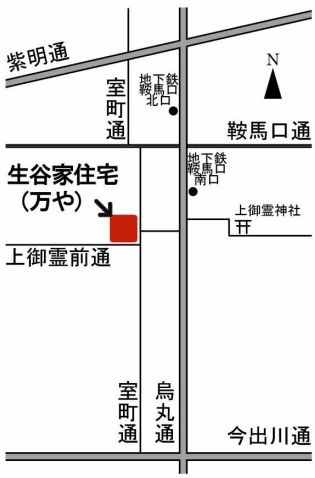
配置図兼１階平面図

祖である生谷伊右衛門是道宗喜が、室町時代（天正年間）に小山郷（現大谷大学南一帯）を拝領し、明治30年代迄、屋号”万（よろず）や”を名乗り商いをして参りました。
この歴史的建造物を地域文化の発信の場として公開する運びとなりました。
建築物の見学（刀剣・古美術・古文書の展示など）並びに茶道・華道・カルチャー教室・コミュニティ広場・イベントホールとしてご利用ください。

オーナー：生谷準之助・啓子　左京区下鴨宮崎町166-38
TEL　075-721-4245



２階平面図



生谷家住宅主屋（屋号：万や）
京都市上京区室町通鞍馬口下る２丁目竹園町１５
TEL:075-441-2930
地下鉄「鞍馬口」下車　歩３分

京町家―生谷家住宅主屋

生谷家は、西陣の一画にあり寛政四年（１７９２）に記された由緒書きによると、室町時代の御家人であったが、時の所司代の命で賀茂川築堤を成し遂げ、「万（よろず）や」の屋号で青物問屋を営んでいた。天明の大火（１７８８）で罹災。現主屋は明治１０年頃建替と推測されてきたが、幕末の嘉永の大火（１８５４）及び元治の大火（１８６４）の被災域外にあった為、江戸末の可能性もある。尾形光琳屋敷も在ったというこの辺り一帯を広く所有されていた。

主屋は、歴史的に新町通と共に京都の南北主道であった室町通に面し、間口は１３．５ｍと大きく、奥行１８ｍに及ぶ。築後約１４０年の間に種々の増改築がおこなわれた形跡が今回の工事で見つかった。北東側の平屋部は主屋に続き増築されたものだが、北側階段の取り付け位置は通常の京町家に比し異例であり、仏間の位置についても同様であろう。又１・２階共に柱材に北山杉丸太を多用し北の妻壁側は入れ子構造の如く構造上の通柱に並べて丸太の管柱を建て床の間、床脇の背面を形成している。丸太の多用や一部低い内法に、ご先祖の茶の湯、数寄屋への愛着も見られる。又、主屋と庭園との関係も京町家では異例で、北妻側にも東西に庭が広がりそれが奥庭（西側）とＬ字に繋がる。その為、１・２階共に次の間の大きな開口部と北庭が直接繋がると共に後程増築された書斎や納戸縁側とも一体的な開放性をもつ。

１階座敷と縁側や台所間の壁と開口の在り方も変遷を重ねてきた。今回、耐力壁のバランス良い配置の為、杉丸太や桧角柱の管柱と荒壁パネルを随所に生かし、東側の厨子（ずし）２階部の軸組みの硬さとのバランスも図った。その為、２階西側は根太を用いない根太レス、厚荒床、小梁増強で対処し、厨子２階は使い勝手も考慮して接合部が一部破損していた登り梁を新材で今までより高い位置で緊結した。

今回の平成の改修工事の要は、水平・垂直両構面の補強とアルミサッシ撤去、土壁の塗り替え、通庭の階段新設（２方向避難）、１階の縁側廻り新調とその屋根の新調空葺化等々である。又、約４０年前増築された北側書斎部の外観整備や設備の配管、配線の整理やエアコンの隠蔽化もその一端である。なお、小埜氏による本格的な作庭（光臨の庭）がある。

――――長瀬　博一（有）長瀬建築研究所

1階座敷八畳、縁側を次の間七畳から見る
座敷は主庭（奥庭）に面し、北庭に面する
次の間と一体利用で十七畳余りに

2階座敷十畳、縁側を次の間七畳半から見る
座敷は西縁側下に主庭（奥庭）が見おろせ、
次の間と一体利用で十七畳半に

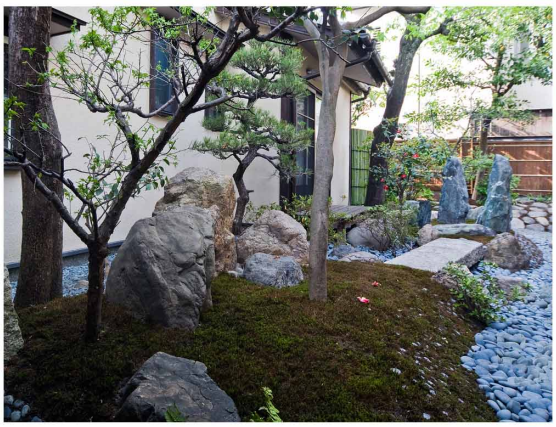
2階展示室（二十畳大）
展示台は全長７．７ｍ
展示壁面共にスポットライト付

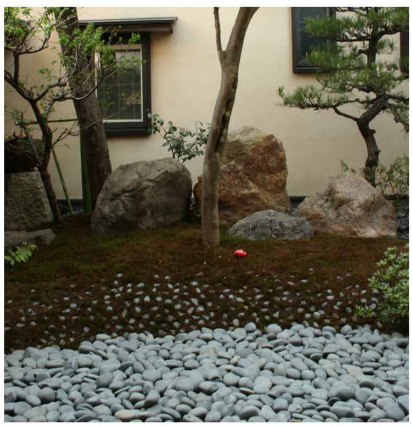
1階茶室四畳半
吊床で町家の出格子を
出書院として生かしている

玄関の間から茶室をみる
玄関の間、四畳と併せ
八畳半でも利用可能

通庭　展示室への新設階段
西と南に高窓、天窓を設け
京町家伝来の空間に階段と
流司台を新設

通庭のおくどさん
竈（くど）の神様（荒神（こうじん）さん）が
祀られ荒神松が飾られ愛宕（あたご）さんの
御札（火除札）が貼られる





光臨の庭

「光臨庭」とは本庭が尾形光琳由来の地である故と、多くの方が本庭へ光臨されることを願っての命名である。仏神降臨の境という意味もある。

庭は尾形光琳屋敷地内にあったと伝える光琳石に、白梅を添えた左手中島と、石橋を挟んで青石に紅梅を添えた右手中島が対峙する。石橋下の大ぶりの那智黒石敷は流水表現、石橋手前の二段石は遊魚石である。極端に傾斜した右手中島の青石は、室町時代の作庭秘伝書にいう「風雨石」の手法。青石を風神に見立て、赤茶けた光琳石を雷神とする。光琳の代表作「紅白梅図屏風」は、光琳が傾倒してやまなかった俵屋宗達の「風神雷神図屏風」にヒントを得たといわれる。雷神を白梅に、風神を紅梅に、そして両神間の空白の緊張関係を流水にと、光琳はそれぞれを捉えなおしたのである。本庭は根源的には軌を一にする両屏風の二重写し、本庭はその三次元化解釈の試みである。　――小埜雅章　京都庭園室